追悼文

「イエスマン」中島暢太郎先生の想い出

本学会会員，元理事である中島暢太郎先生（京都大学名誉教授，同元防災研究所所長・災害気候学）は，去る３月14日85歳の生涯を閉じられました．中島先生は，1946年（昭和21年）京都大学理学部地球物理学科を卒業された後，理学部気象学研究室の助手，講師を経て，1958年から気象庁に移られ，大阪管区気象台技術部予報官として天気予報の実務に従事されました．1966年には京都大学防災研究所災害気候学部門の教授として大学に戻られ，この間，1977年から２年間は研究所長の要職にも着かれております．1986年定年退官された後も，日本気象協会や京都府・京都市公害対策審議会などの多くの委員や顧問を務めて，気象・気候分野の行政にも大きな貢献をされてきました．

と，公式的な先生のご紹介はここまでとして，先生の数少ない学生の一人であった立場から，中島先生（愛称は先生のお名前の字から，「のん太郎さん」であった）の想い出を綴って，私なりの哀悼の意を表したいと思います．私が先生に最初にお会いしたのは，1967年夏，京都市南部中書島の防災研宇治川水理実験所にあった先生の研究室に，探検部の学生として訪問した時でした．訪問の目的は，探検部で私たちが画策していたチリ・パタゴニア探検の隊長さんになっていただくお願いをするためでした．京大探検部では，学生の探検でも，正式の学術探検隊として認められるためには，京大内外の学者先生に隊長になっていただき，学術的な指導とともに，探検に必要な資金集めなどもしていただく，というのが伝統になっておりました．したがって，探検にでかけたい私たちにとって，隊長となってくれる先生を見つけることがまず大きな関門であったわけです．まだ理学部２回生（２年生）でろくに学問もしていない身ながら，教授先生の前で，私たちの探検が，学術的にもどんなに重要かを，冷や汗をかきながら説明したわけです．（実際，ほとんど冷や汗ものの内容でした．）じっと聞いていた先生は，聞き終わってから，「ええ話やと思うけど…….」と言われました．私たちは如何に「ええ話」であるかを必死に説明したように記憶しています．

こうして，中島先生と私の40年以上にわたるお付き合いが始まりました．今から思えば，まだ教養課程の学生が計画した（怪しげな）探検隊の話によく乗って下さったと，ただただ感謝するしかありません．その後１年間は，まだ教授に赴任されて研究室の立ち上げ時期であったにも関わらず，この探検隊のために，大阪・京都での募金活動や頻繁な打ち合わせ会議など精力的にこなして下さり，同時に探検部から出すことになったアンデス栽培植物調査グループのリーダーをされることになった農学部の助教授の先生とお二人で，約1000万円という，当時（1968年）としてはとてつもない額の募金を達成してくださいました．そして，私たちは無事，チリ・パタゴニア氷河・古地磁気調査隊を組織して，南米まで行くことができました．中島先生は，すっかりパタゴニアが気に入られ，帰国後も科学研究費で自ら「パタゴニア氷河・気候調査」を組織され，その研究は，北海道大学，筑波大学などの研究者に引き継がれて，現在に至っています．このような40年にわたる息の長い研究は，パタゴニア氷河群の近年の顕著な後退などの実態など，後継の研究者により多くの論文として発表され，最近の IPCC（気候変動に関する政府間パネル）報告にも引用されています．発端は私たち学生の探検でしたが，中島先生は，ご自分のやりたい研究のきっかけにもされたわけです．

さて，その後，パタゴニアから帰国し，大学院を受

© 2008　日本気象学会

験する際に，私は，（探検部での経験から）何でも自由にやらせてもらえそうだ，という極めて単純な理由で，中島先生の研究室を希望しました．先生は，学生の希望や要求に対して，反対や拒否をされることはほとんどされない「イエスマン」でしたが，この時だけは，当初強く反対されました．その理由は，「安成がうちに来たら，これまでのような友だち付き合いがでけへんやないか．」という，いっぷう変わった，しかし心温まる理由でした．私は自分の身勝手な考えを恥じるとともに，先生の優しい気持ちに改めて感謝した次第でした．しかし結局，私は中島研究室に進み，研究も含め，またいろいろと迷惑をかけることになってしまいました．

先生は，私たち学生に対し，あれをやれ，これをやれ，ということは，ほとんど言われませんでした．一方で，私たちが，先生に何か相談しても，「やったらあかんとは言わんけど…」とか，「まあ，ええと思うけど…」という返事をされるのが普通でした．血気盛んな学生にとっては，いつも肩すかしを食わされたようなご返事で，やや不満な気持ちになることも多かったと記憶しています．しかしこれは先生の消極的な態度というよりも，できるだけ若い人たちにさせようという気遣いと，先生のシャイな性格が複雑にからんで言われていることに気がついたのは，大学院も終えてかなり経ってからでした．実際，研究でお金がかかることであっても，たいていのことは面倒をみてくださいました．私は結局，博士課程の３年間も，ヒマラヤでの観測などを中心で過ごし，論文もロクに書かず，学位も取らないまま終わることになりましたが，先生は，３年目の終わり頃，助手の就職口を持ってきてくださいました．

中島先生は，お酒をこよなく愛されていました．京都の祇園近くの飲み屋街に行きつけの小さなお店があり，大学からの帰りなど，よく立ち寄られていました．何か相談したいことがあると，学内よりも，そのお店に来るように言われることのほうが多かったように記憶しています．数年前，脳梗塞で倒れてご自宅で療養されている先生のお見舞いに伺ったことがあります．幸い，その時は，かなりお元気で短時間なら付き添いがあれば散歩もできるご様子でした．しばし，お話を交わしたあと，「安成，昼飯は？」「いえ，まだ」「ほな，ちょっと出よか」ということで，心配そうな奥様をよそに杖をつかれながら外へ出られ，タクシーで町中のレストランまで行きました．食事と共に，「ちょっといくか？」といわれて日本酒を注文され，昼間から二人で酒盛りをすることになりました．お宅では奥様の目が厳しくて飲めないので，私をダシにうまく飲みに行く機会を作られたようでした．

中島先生は，ひとことでいえば，周りの人たちに対しても，ご自分の人生に対しても，「イエスマン」でした．人生は，自然に接し，伝統や文化にもふれ，お酒もふくめ，好きなことを悠々と楽しむのが一番である，そのためには，人と人とのめぐり合いとつながりこそが大切である，というのが先生の哲学ではなかったかと感じています．育ち，学ばれた京都の風土と文化がその背景としてあったことも確かです．そのようなのん太郎先生とのめぐり合いと長いおつき合いを通して，私自身も，先生の「イエスマン」哲学を，不肖ながら，大いに学んできたつもりです．中島先生，長いあいだ，本当にありがとうございました．

（名古屋大学地球水循環研究センター　安成哲三）